



イラストレーター

丸岡 慎一さん

まるおか しんいち

【プロフィール】1973年神奈川県横浜市生まれ。多摩美術大学大学院美術研究科修了。2005年「ニッサン童話と絵本のグランプリ」大賞。05・06・09年「ポローニャ国際絵本原画展」入選。長崎県、北海道にて教職に就いた後、秋田公立美術工芸短期大学に勤務。15年から名古屋芸術大学デザイン領域イラストレーションコース講師。絵本に『しろいみち』『筆洗バケツの住人』など。名古屋在住



しろいみち

おそくすすすめ

1本の「しろいみち」。ページをめくれば、上から下、左から右、左上から右下へと「みち」は続く。女の子が軽やかに「みち」を駆けて行く。「かごをまがって むこうがわへ しろないまちも」「みちがとぎれこも」
途切れたらチヨークで「みち」を描き、道草しながら、迷いながら進んで行く。ひとりのときも、誰かと一緒のときも。

バブル崩壊後に社会に出たロストジェネレーション世代。「敷かれたレールの上は歩きたくない」と気負う反骨精神と、「コミュニケーション」の頃から描いていた絵を「自意識の延長」と意識してからは、「言葉にできないことを描きたい」と願うようになった。

「現代美術と向き合っていた学生時代、そのあり方が難しいと思ったときに絵本の大切さに気付きました。美術は決して多くの人には受け入れられず、どんな表現をしても『届かない』というジレンマはある。でも、子どもたちに届けることが大事なんだと」

白を基調として描いた絵本『しろいみち』。縦横無尽に画面を駆け巡る「みち」で女の子は走り、遊び、惑い、誰かと出会う。ページを閉じた後も、詩的な余韻が静かに心に残る。

「子どもたちの周りには絵本だけがあるわけじゃない。日本は、テレビ、映画、インターネットでいろいろな情報やビジュアル、サブカルチャーがあふれている特殊な状況。デジタルネイティブと呼ばれる子どもたちに向けて、表現する人間は何をすべきなのか考えなければならぬ。本体の物語の意味は届かなくて当たり前。それでも大事なことは、ちゃんと届けていきたい」

秋田に住んでいた頃は、岩城の海沿いや下浜の小さな集落の一軒家に住んでいた。

「勤めていた大学の近くにはなく、農村に住みました。近所の方々と触れ合いながら生活ができて、下浜ではナマハゲもさせてもらいました。地域の人を守るうとして大切なるものを体験させてもらった。5年間暮らして、上っ面ではなく、深く関わり合えたことは嬉しくなって大きかった」

自分自身の「しろいみち」は、横浜から平戸へ、札幌へ。秋田では学生たちに出会い、土地の人と深く交わり、ナマハゲも知った。「みち」から「みち」へ。物語は途切れず、進む。